

心づかいと思いやり

小 六

ぼくは五年生のとき、スーパーで車いすに乗って買い物をしているおばあさんを見かけたことがあります。そのおばあさんは、スーパーの商品がなかなか取れなくて困っていたり、車いすがかべなどにぶつかったりしてすごく大変そうでした。ぼくは、声をかけて手伝おうかと思いました。知らない人だから「こわい。」「はずかしい。」などと心の中で思っていました。ぼくは、「なんで声をかけることができないのだろう。」「他の人がやってくれるかな。」などと、とてもなやんでいました。しばらくしても、だれ一人助けようとする人はいなかった

ので、ぼくは、その場でさらに困り果ててしまいました。そうこうしているうちに、スーパーの店員さんが通りかかり、手助けしていました。そのときのことを思い出すと、店員さんはやっぱりえらいなと思いました。なぜ、ぼくは自分から声をかけられなかったのだろうか。後かいました。なぜ、気持ちかもやもやするのと考えてみると、お店の中にいて見ぬふりをして助けられない人と同じだと思っただけです。助けたい。声をかけたい。しかし、助けたい気持ちがあっても、それだけでは他の人には伝わりません。ちゃんと行動に移さなければ、困っている人を助けることはできないのです。

その日の晩ごはんのとき、母にスーパーでの出来事を話しました。ぼくは、

なぜ、すぐに助けることができなかつたのか不思議に思い、母に聞いてみると、「知らない人に声をかけるのはとても難しいこと。勇気がなければ何もできないのよ。」

と教えてくれました。

その言葉を聞いてからは、困っている人を見かけたら勇気を出して積極的に声をかけようと思いました。しかし、心の中にはまだ少し「はずかしい」「こわい。」などの気持ちもありました。だから、このときのぼくには本当の勇気がなかったのかもしれない。

そんなぼくに、勇気を出すチャンスが訪れました。ぼくの小学校の近くにある小さなスーパーの裏に目が不自由でつえをついて歩いているおじいさんがいました。そのおじいさんは道に迷って

ました。初めて会った知らない人だったし、道を教えられるか心配でした。けれど、もうこんなチャンスは来ないかもしれないと思い勇気をふりしぼって、「だいじょうぶですか。」

と声をかけてみました。すると、

「スーパーへの道が分からなくてなあ。」とおじいさんが言いました。ぼくは、スーパーへの道順を知っていたので、教えることができました。そうすると、

「ありがとね。感謝してるよ。」

と言ってくれました。ぼくは、そのときのおじいさんの笑顔が今でも忘れられません。ぼくの心は、とても温かくなりました。「はずかしい」「こわい。」でいっぱいだった心が、ずっと晴れたしゅん間でした。

だれかを助けると、相手が助かって安

心するだけではなく、助けた人もうれしい気持ちになります。今考えると手助けしようか迷っていた自分がもったいなかったと思います。

ぼくは、このように困っている人を見かけたら助けられる人がぼくたちの小学校や町に増えてほしいと思っています。

六年生になって、道徳の授業で「心づかい」と思いやり」という勉強をしました。その中に、「心や思いは人には見えない。けれども、心づかいや思いやりは見える。それは、人に対する積極的な行為だから。」ということが書いてありました。自分が心の中で思ったことを思いやりのある行動に表せて、改めてこの詩の意味がよく分かりました。ぼくの住む町、そして埼玉県、さらに日本、最後は世界

中に「心づかい」と思いやり」が広がれば、みんなが毎日笑顔でくらせる世界になると思います。まずは、来年の東京オリンピック・パラリンピックで世界中の人が日本へ来るときに、思いやりのあるおもてなしで少しでもぼくの気持ち伝わるよう行動したいと思っています。

自分の思い
行為にうつせば
思いやり